



～シンギュラリティを生きる～

最近、米OpenAIが「ChatGPT」を公開し、話題となっている。どんな質問をしてもまるで人間のように回答するChatGPTは、一体何を考えているのか。人工知能は先進的だが、怖いようにも感じられる。さあ、人工知能について落ち着いて考えてみよう、というのがこの本の趣旨だ。

さて、主題にある「シンギュラリティ」とは「技術的特異点」である。言うなれば「人工知能やロボットが、人間の能力を超える転換期」のことだ。私達は既に、シンギュラリティの真っ只中で生きているというのは、皆さんもお分かりだろう。例えば、ChatGPTの登場によりライターの仕事はかなり苦しい状況になっている。海外の大型掲示板『Reddit』にて、匿名フリーライターが、「AIの仕事があなたの仕事ほど良くないことは理解しているが、利益率を無視できない」とクライアントに言われ仕事が無くなった、と告白した。まさに仕事がAIに奪われた例である。ライター業界以外でも、AIで置き換えられる職はたくさんある。しかし、AIは完璧な存在ではないことを忘れてはいけない。情報の迅速性や記事の本数も求められるライターはAIで代替できるが、個性溢れる新たな小説を書くことはできない。AIは「過去に基づいたデータからしか仕事ができない」のである。

この本の著者の中西氏は、「人間と機械がそれぞれ得意な分野を担当する」(P119)のが良いと述べている。AIに関わらず、自分は何が得意でどんな長所があるのかを把握するのが、私達が「シンギュラリティ」を生きる手立てとなるのかもしれない。()



『シンギュラリティは怖くない』
中西崇文 著 / 草思社

参考文献：

『報酬10分の1に』『時給80ドルのライターだったがクビ』海外で「AIに仕事を奪われた」悲鳴上がる」
(news.yahoo.co.jp/byline/shinoharashuji/20230422-00346699)

作家紹介

三階図書館には、池井戸潤の作品が数多く置かれていますので、興味のある方はぜひ足を運んで下さい。()

さて、池井戸氏の小説の魅力は何と言っても、ありありと描かれる

圧倒的な「現場感」だと思います。『下町ロケット』や『陸王』からは、工

場で働いたことがない、というよりかは会社で働いたことがない私

たちでも、熱意溢れる社員達とそこで働いているかのような高揚感

会社として利益を上げる難しさを直に感じるすることができます。また、

大人達の間で繰り広げられる足の引つ張り合いには、嫌悪感を抱き

ます。少し滑稽にも感じられます。

何よりも、様々な逆境へ立ち向かう主人公たちを目の当たりにす

れば、明日への希望が湧いてくるのではないでしょう。

三階図書館には、池井戸潤の作品が数多く置かれていますので、興

味のある方はぜひ足を運んで下さい。()

思想を盗め！

「働く人」を描く、元銀行マン 池井戸潤

今回の「思想を盗め！」では、池井戸潤を紹介します。彼は、江戸川乱歩賞を始めとした様々な賞を獲っています。また、多くの小説がドラマ化され、『半沢直樹』は瞬間最高視聴率四十六・七％を達成しました。彼は根っからの読書家で、子どもの頃から図書館に行ってはミステリーを読み漁っていたそうです。それが、作家を志すきっかけとなりました。

大人になった彼は七年間銀行に勤め、融資を担当します。『オレたちバブル入行組』『オレたち花のバブル組』(ドラマ『半沢直樹』原作)を読めば、彼の銀行での経験が執筆の礎になっていることが分かるでしょう。『オレバブシリーズ』の主人公、半沢の肩書は「東京中央銀行大阪西支店融資課長」です。これは、池井戸氏がかつて銀行マンだった頃と見事に合致しています。

さて、池井戸氏の小説の魅力は何と言っても、ありありと描かれる

圧倒的な「現場感」だと思います。『下町ロケット』や『陸王』からは、工

場で働いたことがない、というよりかは会社で働いたことがない私

たちでも、熱意溢れる社員達とそこで働いているかのような高揚感

会社として利益を上げる難しさを直に感じるすることができます。また、

大人達の間で繰り広げられる足の引つ張り合いには、嫌悪感を抱き

ます。少し滑稽にも感じられます。

何よりも、様々な逆境へ立ち向かう主人公たちを目の当たりにす

れば、明日への希望が湧いてくるのではないでしょう。

三階図書館には、池井戸潤の作品が数多く置かれていますので、興

味のある方はぜひ足を運んで下さい。()



	1		10		11
6				2	
3	8	9			
	4				
7					
5					

並べ替えて答えを導け！

★がついているカギは、この館報の中に答えのワードがあります。解答がわかったらぜひ図書館の解答BOX前までお越しください。毎回解答していると良い事があるかも…

ケッペン的气候区分はAwの国！！

--	--	--	--	--

心に移りゆく よしなしごと

このコーナーでは、局員が自身の体験や見聞を通して思ったこと、考えたことを、「そこはかとなく」書いた「エッセイ」を紹介していきます。

アイデアを逃すな

人間は、普通に生活しているだけで山ほどのアイデアが頭に浮かぶ。「新しいスマホ買おうかな。」「明日のお出かけはこの服着ようかな。」「明日の学校ではあの子に話しかけようかな。」「こんなことできたら面白いな。」そう、まるで炭酸水のシュワシュワみたいに。

僕自身も普段、様々なアイデアを思い浮かべている。しかし、何故かそのアイデアの大半は1時間ももしないうちに忘れてしまう。あんなにワクワクして「こんなことしたいな!」と思い立っていたのに、何故か忘れてしまっているのだ。実際に、見たかった映画をダウンロードしたけれど、見るのを忘れていて1年経っていたなんてことがあった。

このようなことは非常に勿体ない。折角、自分が興味をそそられてワクワクするようなアイデアを思いついたとしても、その意味がなくなってしまう。そこで、僕は自分が思いついた様々なアイデアをメモする習慣を始めた。ただ単純に、スマホのメモなどに「今月中に友達と花見をする」などと綴っていく。こうやって羅列していくと、いかに自分が優れたアイデアを持っているのかを実感することが出来る。みなさんもこの習慣を始めれば、自分の思わぬアイデア力を実感出来るかもしれない。()



月高この1枚！

新入部員歓迎の姿勢は校内一番だほー。

場所：美術部 撮影：

本屋大賞 2023

- 1 『**爆弾**』 呉勝浩 著 / 講談社
- 2 『ラブカは静かに弓を持つ』 安壇美緒 著 / 集英社
- 3 『光のところにいてね』 一穂ミチ 著 / 文藝春秋
- 4 『**爆弾**』 呉勝浩 著 / 講談社

本書は、都内各地に仕掛けられた爆弾を、容疑者が出すクイズをもとに探すミステリー文学となっています。私は読んでいて、どこに爆弾があるかわからないという臨場感、クイズの答えと意味がわかったときの興奮と衝撃。そして、真相が明らかになった瞬間、思わず声が出て、これまでの文章が全て音を立ててつながる感覚がとても爽快感のある本だと思いました。(喜納)

今回紹介した「爆弾」という作品は、「このミステリーがすごい(宝島社)」「ミステリーが読みたい! (早川書房)」の2つのランキングで1位を取り、直木賞の候補にもなった作品です。この作品を抑えた大賞の作品がどんな作品なのか、気になった方はぜひ図書館に足を運んで見てみてください。()



片言隻語

5月になると、ツツジの鮮やかな紫が私の目を集めます。コンクリートの海に暮らす私達にとっては極めて貴重な緑と触れる機会。花から乱反射した光は視神経を通り、脳へたどり着いたときにようやく私は春の到来を感じられます。

一ヶ月が経ち、1年生はようやくクラスメートたちの名前を覚えた頃だと思います。しかし、高体連が終わった後にはテストや学校祭などのクラス単位で活動する時間が増えてきます。より良い青春のため、努力、自問を続けましょう。より良い青春のために。()